
錬金術師…始めました…

アトリエ工房

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬金術師：始めました：

【Nコード】

N6369V

【作者名】

アトリエ工房

【あらすじ】

アトリエシリーズって意外と面白いと思う今日この頃・・・あの、アイテムをせこせこ作る面白さが堪らない。

とまあ、アトリエシリーズ・・・続くか？

プロローグ…なのか？（前書き）

息抜き作品1号

プロローグ…なのか？

『君今日から錬金術師ね』

「はい？」

『だ・か・ら錬金術師だよ錬金術師。聞いたことぐらいあるでしょ』

いや、錬金術師ってアレだろハガレンとかアトリエシリーズとかの

「いや、なんでさ」

『なんかかつこよくない？』

「というかあんた誰？」

『禁則事項です♪』

うわゝスゲー殴りたい

『じゃあ行ってきたてよ時代設定はかなり昔で、ああ何かしらの才能を（以下略）にしよう』

うん決めた。こいつ殴ろう・・・声しか聞こえないけど誓った。

『じゃあ、行ってら〜』

「いつか、絶対ぶん殴ってやるからな〜」

『三流悪党オーラがあふれ出るセリフに少々感激』

捨て台詞を残しどこかへ旅立ったのか？

目覚めたのは・・・どこだ(前書き)

主人公目覚めの時！いや、違うんですけどね

目覚めたのは・・・どこだ

ちわゝす転生者のセツナ・ウライムでゝす。無論これ転生後の名前ね。いやゝビビったよ真面目にだって昨日の事は夢だと思って起きたら身体縮んでるし。窓から外出てみたらまあ、思った通りいつも見える街並みと違うし・・・神よ・・・これはあれか？何かしらの嫌がらせか？

「セツナゝ朝食だから速く来なさゝい」

聞こえてくるのは女性の声・・・多分この子の母親だろう

「はゝい」

まあ、無難に返しとくか：

『いただきます』

うん！ぶっちゃけあんましおいしくない・・・へ？ここはおいしいって言うところ？いや、だってあれだよ・・・なんだけど現代みたいに品種改良が良くないよ？と言うかカスの時代だよ・・・たぶん。味がねなんていうか薄いのよぶっちゃけ現代日本人からしてみたら不味いよ。

「ああ、そうそうセツナ。食べ終わったら卵買ってきてくれる？」

「へーい」

「・・・ねえ、セツナ？なんか変なものでも食べた？いつもと様子が違うけど」

やべ！いつも通りに返ししまった。俺（今）ぐらいの歳の反応は「へーい」じゃなくて「はい」が基本だろうが」

「別に何でもないよ」



「さてと、言われた通り買い物すんだし・・・あの声だけの言っただ・・・て、何言ってたっけ・・・なんか才能だとうだこうだ能力が・・・ああ、思い出せん」

「まあ、なんとかなるでしょ」

なんとかなるよ多分

「能力がどうだこうだ言ってたけど・・・思いつく限りやってみるか」

「まずは、転生者諸君大好きな赤さんから始めるか」

イメージは・・・勝利すべき黄金の剣でいっか・・・いや、最初から難易度高すぎか？というか、この体に魔術回路^{カリバーン}って存在するか？

「えーと確か、創造の理念を鑑定し、

基本となる骨子を想定し、

構成された材質を複製し、

製作に及ぶ技術を模倣し、

成長に至る経験に共感し、

蓄積された年月を再現し、

あらゆる行程を凌駕し尽くし――

ここに、幻想を結び剣と成す――！だっけ？」

そうしてイメージだけを頼りに剣を創りだす。

「・・・マジで出来たよ。でも、宝具もどきなんだよね」

そう、出来たにはできたんだが・・・あれだね、神秘だっけ？が全く附属されてない欠陥品つまり、切れ味とか耐久度とかいいけど、神秘がない宝具つまり、宝具（笑）が出来たんだよね。

まあ、設計図も何もなくで作ったから当たり前なんだけど・・・この勝利すべき黄金の剣もどき。^{カリバーン}あえて言うなら笑うべき黄金の剣だね^{カリバーン}

「まあ、これでも業物の部類に入るからいつか・・・って言っても・・・俺剣なんか使えなくね？」

今更ながら気がついた・・・俺剣なんか使えないじゃんorz

まだまだ転生者の苦難は続く

目覚めたのは・・・どこだ(後書き)

我ながら・・・なんか微妙

旅立ちの日？

前回から5、7年ほど経ちました。今はピチピチの13歳です。

え？跳びすぎ？

仕方ないじゃないさ。

勉強して、戦闘訓練して、食って寝る。そんな日常ですよ？

それよりも、最近気がついたけど、多分ここアトリエシリーズの世界だと思っただよね

理由は機械があるんだよね街並みは中世？ぐらいなのに。まあ、現代と比べたらカスだけど

それで魔法？魔術？の方面は投影の錬度上げだね。それ以外にもいろいろやったけどあんまし手ごたえがない。

それに今まで数えるぐらいしか使ったことないけどこの世界にはこの世界の魔法があるしね。

アトリエ流の魔法、僕も戦闘技能を学ぶときに教えてもらったよ・
・爆発したけど（泣）そして感じたけどFateとかネギま！の魔法の方がなんていうの？手ごたえ感じるからそっち方面の修行の方を重視してアトリエ魔法の練習してないんだよね

話は変わるが、ここ、アトリエシリーズのどれくらい昔なんだろう

ね？

もしかして、錬金術が全く無い遙か昔とか言わんよな？・・・あり
そうだけど・・・

と、まあそんなこんなでついに旅立ちの日？

「父さん、母さん行ってきます！」

「ああ、行って来い。そして二度と帰ってくるな」

父よそれはないんじゃないか？それと、隠してたエロ本を母さんに
教えて全部処分されたのをまだ根に持ってるのか

「いってらっしゃい。危ないところには行っちゃ駄目よ。」

そして母よ危なくない冒険なんて存在しないのではないか？

「へーい。ぼちぼち頑張るわ」

今、錬金術師（予定）の旅が今始まる！！なんちゃって

旅立ちの日？（後書き）

ようやく、ふりだし

やっぱりメインの方が書きやすい

錬金術師・・・誰もいない

さて、あれから数年たちもう、年齢もそろそろ、20歳になりますあれから分かった報告としては、そもそもこの世界には現段階で錬金術という者は存在しないということ。

これは、大陸も渡って調べたから間違いない。つまり、この世界はアトリエシリーズの世界の多分、数百年ほど前なのだろう

そんなこんなで、旅してるうちに色々と成長したよ。主に魔法とか

ちなみ俺の戦闘スタイルはまず、投影魔術（偽）で白黒の双剣（コ
レが一番楽）を創りぶん投げて、壊れた幻想で爆破して雑魚は一層
プロレキン・ファンタズム

強敵（主にドラゴンとか）は→を10回ほど続けて、弱ったところ
をネギまの白き稲妻で麻痺させるか、雷の斧で首をぶった切って倒
す。

それはいいんだけど、戦ってる方が多くね？俺、一応錬金術師志望
なのに来ればアトリエの世界でハガレンの錬金使いてゝな。楽そ
うだし

Side ?

我は非常に暇だ、世界から賢者なんて呼ばれているが、暇だ、かなり前に不老の薬を作ったまでは、良かったんだが暇だ引きこもって300年ほど魔法等の研究をしていたが流石に200年程度でもう魔導は全て終えた、肉体労働は嫌だし、ここ最近（100年ほど）趣味としていた新しいレシピ作りも終わった・・・さて、どうしたものか・・・ああちよいどいいところに、誰か通ったし・・・

やべゝ迷ったゝ

皆さんいかがお過ごしでしょうか自分は今、絶賛迷子です
ああ、ちよいどいいところに誰かいるし道を聞こう

「すみません、道をお尋ねしたいのですが」

「ん？なんかようか？」

「道に迷ったんで出口を教えてほしいんですが」

「ん？そうじゃな、うむ。ええぞ」

「ありがとうございます！」

「その代わり何かワシに面白いもんをくれ」

「面白いもの？」

「うむ」

面白いものね、投影で創ったラノベ渡せばいいだろ多分

「はい、どうぞ」

「なんじゃこれは？本か？」

「ええ、多分面白いと思いますよ」

「……ちょっと見せてくれ」

で、数時間後。

老人？は見事にドッキリとはまっていた。

「こんな面白いのが人間の世界にはまだまだあるのか！？」

「ええ、まあ、自作ですけど」

「自作！これは主が造ったと言うのか！」

「……ええ、まあ」

嘘は言っていない彼は造ったと言ったから、書いてはいないが一応俺が造ったし

……喜んでもらえたようで何よりだ

「それより道を」

「よしワシと来い」

「は？」

「いいから」

「えっ！ちよ待」

拝啓、父と母へ息子は老人に拉致られました

修行？いいえ拷問です

「さて我が弟子（仮）よ」

「いやいや、まてや爺」

「口が悪いな」

「拉致られて、不平不満の無い奴はいないと思うぞ」

「というかこの爺さん誰だよ…」

「うむ、ワシはドルイドという」

「人の心を読むな」

ドルイド？はて、どこかで聞いたような？なんか、どっかの物語の
・
・

「まさか、あんた『シャーレンの書』に出てくる賢者ドルイド？」

「ん？まあ、そうなんじゃないか？しかし、シャーレンとはまた懐かしい名前を聞いたな」

ちなみに『シャーレンの書』というのにはありがちな魔王を倒す勇者の物語で、この大陸ではまあ、誰でも知っている話だな・・・本当だったんだなあの話

「で、俺に何の用だ？」

「うむ、ワシは知つてのとおり魔導師でな、不老の秘薬を作ったまでは良かったんだが、やることがなくなってしまつてな」

「そこで、たまたまいた俺が拉致されたと」

「そおいうことじゃ。だが悪い話ではないぞお主少し魔術をかじっているだろう」

「まあな。それがどおした」

「つまり、わしに弟子入りすれば賢者とうたわれたワシの技術などを継ぐことができる。悪い話ではないだろう」

確かに悪い話じゃないな・・・錬金術師志望といっても何をすればいいのかわからない。この爺さんの知識ならそれに準ずるものがあるかもしれない

「わかった受けるよその話」

「そうかそうか、ではこれを吞め」

手渡されたのは一粒の錠剤

「何だこれ？」

「いいから吞め」

「分かったよ」

吞んだ方がいいが何の変化もないな

「今飲んだのは不老の秘薬じゃ」

「ちょっと待て」

は？イキナリ何言っちゃってくれてんのこの爺さん

「てことは俺すでに不老？」

「そお言うことだな」

まあ、いつか悪いことじゃないだろうし・・・多分

「それはそうと早速修行を始めるか」

「ああ」

～～時は過ぎ～～

「だゝ分かるかこんなの」

「何言っておるこれは『魔導事始』という本でそれなりの魔導師はこれで学習するもんだぞ」

「それはあんたが現役ごろの話だろ！コレ全部古代語で書かれてて何書いてあるか全く分かんないんだけど！」

「我がままじゃな。じゃあ、ほれ」

渡されるのは見ただけで吐き気がするほどのクソ分厚い辞典

「それで一語一語解読してから読みなおせ」

は？ナニヲオツシヤラレテイルンデシヨウカコノクソジジイ

「出来るわきゃねーだろ！」

「まずそれがわからないと、始められんからな」

この悪魔めが

なんやかんやで俺の修行という名の拷問は始まったとき

修行？いいえ拷問です（後書き）

主「あのくそ爺が」

作「落ち着けて」

主「ありえねえだろ！なんで古代語！現代語にしてほしかった」

作「それは無理と言うもんだぞ主人公よ」

主「お前が頑張ればいいんだよ作者」

作「ガンバ！」

使い魔召喚！なにが来る！

「終わった」

遂にやり遂げた一語一語解読していき遂に！遂に！

「読みおえたぞ」

「なんじゃ、騒々しい」

「ああ、ようやく終わったんだよ」

「そうか、では・・・」

・・・まさか・・・

「うちの書庫にある本全部読み終えろ」

は？あの優に1万冊越えてるあれを？・・・んなアホな

「冗談きついで爺」

「じゃあ、頑張れ」

ゑマジでか・・・

~~~~時は流れ~~~~

「あゝなんか今なら悟りを開けそうな気がする」

「なんじゃ、終わったか・・・次は」

今度はなんだ？ いい加減に休ませてほしい

「使い魔を召喚するか」

へ？ 使い魔？ あのを、黒猫とかああいうやつ？・・・凄く欲しいです

「なんじゃ、その輝いた目は・・・」

「いいから、どうやって呼ぶんだ？」

「まずは・・・って何勝手に始めてる！」

「気合いで何とかなるだろ・・・多分！」

「よいか、まずは正式な魔法陣を・・・」

「ゼロ魔式で行くぜ！」

「話を聞け！」

テンションは最高にハイってやつだZE

「力を司るペンタゴン。我の運命さだめに従いし、”使い魔”を召還せよ  
！」

私が召喚の呪文を唱えると正面に鏡が現れた。せ、成功だ！・・・  
だが、何故か鏡が優に10m越えてるんだけど・・・どんだけでデ  
カインだよでも・・・  
何が来るかなワクワク

そして現れたのは王の如き威厳を放つ竜・・・俺はこいつを知っている

「・・・・・・・・」

俺は絶句した・・・ありえない。ゼロ魔の使い魔の召喚は、“持ち主にふさわしい力を持った使い魔”が召喚される・・・だが、俺が呼び出したのは竜王バハムート・・・某最終幻想において“最強”クラスの力を持つ召喚獣・・・俺とは釣り合わない

『人の子よ我を呼び出したのはそなたか？』

「ああ、それは間違いなが手違いじゃないか？」

『否、汝は我を呼び抱いたのだ。そこに偶然などありえぬ』

「つまり、俺は竜王。お前に足る器だと？」

『否、今の《・・・》主では我を従えるに足りぬ』

当たり前と言えば当たり前だな・・・

「今の《・・・》とはどお言うことだ」

『それは汝が未来、汝の器は未だ矮小なれど、いつかは我をも収めるものとなるう』

「可能性ね」

『だが、主も手ぶらでは恰好がつくまい・・・我が眷属を汝が傍に送ろう。我が眷属より汝の竜を選ぶがいい』

『その者は智恵の竜なり。汝に『智』を与えよう

その者は力の竜なり。汝に『力』を与えよう

その者は心の竜なり。汝に『魅力』を与えよう』

「俺は・・・」

**使い魔召喚！なにが来る！（後書き）**

いったい、どれを選ぶのか・・・



## 新たな旅立ち（前書き）

この小説のこと忘れてた・・・

## 新たな旅立ち

「まったく勝手なことしよって」

「だが、反省もしていないし後悔もしていない！」

「・・・もういいや」

「さてと、とりあえず使い魔は・・・どこにいるんだ？」

「ああ、俺の体と同化してるからな」

「ふむ、持ち主と同化する使い魔か・・・興味深いな」

研究したいとか言うなよ・・・俺が解体<sup>バラ</sup>されるから

「で、この次は？」

「ああ、これでもう終了じゃ。もう教えることは大体無い」

「え！これで終了！ていうか大体ってなんだよ」

「些細なことじゃ」

全くこの爺さんは・・・

「今までお世話になりました」

「達者でな」

ここから俺の本当の物語が始まる！・・・・・・なんかキャラじゃないな

## 新たな旅立ち（後書き）

このまま次行きます

外伝　そして伝説に（前書き）

外伝

## 外伝 そして伝説に

私は学者のヘンリー・カーライルという。

今日は、伝説の人について語ろうと思う

そう、彼の【賢者】の話をね

【賢者】を称して、『この世全てを知る者たち』と呼ぶ事もある。

これは事実かどうかは定かではない。

彼らは永遠の時を生き人々に文明を与えたとされている。

だが、その中でこの世界に最も偉大な文明を与えた者は

この世界に魔術をもたらした『シャーレンの賢者』ドルイド、

そして錬金術と呼ばれる技術を与えた『黄金の賢者』セツナ・ウライム

錬金術とは、その名の通り金を創りだす技術だ。だがこの技術は様々な場所

に応用され、今では薬を始めとした日常品さえも、創りだすことが可能となった

だが、この技術はとてなく難しくこの分野を収めた人は、そうとうの秀才だ。話は変わるが、錬金術は、この世界に存在する物質を緑、青、赤、白の4色に分類し、そこから色々な工程をたどり様々なものに変化する。私も詳しくは知らないが、これを専門に研究したりする者を錬金術師と呼ぶ。

そして、錬金術師達には目標がある。なんでも、世界の心理を解き明かすことらしい。かなり無謀な挑戦だと私は思うがね。そして、金は上位の錬金術師でなければ錬成できない。なら、何故、錬金術と呼ぶのだろう。私的には錬成術のほうが合っているともうのだが・  
・そして、錬金術師たちから、セツナ・ウライムは神のごとく崇められている。

だが、初期の頃は錬金術もこれほど盛んではなかったが、なぜそれほどまでに名が知れ渡ったのかと言うとその理由は、人間の馬鹿さ加減の象徴。これに尽きる。

とある国が、錬金術を使い、街一つ滅ぼすほどの爆弾を大量に作成して投下したりしたのが原因と言えよう。その国が錬金術を悪用した数は両手じゃ数えきれないね。

それから、各国がこぞって国力を高めようと、錬金術を使い兵器を生み出していった。

そして、遂には死者蘇生という、禁忌まで犯そうとする者たちがあらわれた。

悲しいことだね。人々の生活を豊かにするために【賢者】の技法は、人の愚かさによって悪用されたのだからね。

だが、ある時、どこからともなく現れた【竜王】と呼ばれる存在に錬金術を悪用していた国は壊滅状態に陥った。それから、錬金術は必要最低限しか、軍事には使われていない。

大変よいことなのだが、私的には【竜王】の正体の方が気になるね。以上で私の説明は終わりだ。

外伝 そして伝説に（後書き）

ちよつとご都合主義



## 今後の考え（前書き）

かなり未来へ

## 今後の考え

ハロ〜♪『黄金の賢者』なんて厨二病的な二つ名がいつの間にか付いており本命を名乗れなくなってしまったセツナ・ウライムで〜す♪・・・合わんな

とりあえず偽名として仕事用に【アレクト】

日常用に【ナギ】と名乗っている。

さて、それはどうでもいいとして・・・そろそろ始まるなアトリエシリーズ初代が

まあ、俺にはあまり関係がないことだけどね。・・・多分

いやそれないからb v作者

なんか不吉なこと言われた気がする。まあ、それはともかくこれからどうしようか悩んでいます。

候補としては

?戦闘能力はそれなりにあるし冒険者(笑)

？再度錬金術師を目指す（作ったの俺だけどWWW）

？何もしない

とりあえず、3番でいっか俺は無駄な努力はしない主義・・・  
と、思っていた時期が俺にもありました。

「合格おめでとう！」

「はあ、ありがとうございます」

この会話は何か？ああ、なんか暇で街ぶらぶらしてたら偶々アカデミーの入試試験がやっていて1位の方にはアカデミー秘蔵の書（黄金の秘書）が与えられるらしい。

お分かりの通り俺の本ですね。だけど、問題としては・・・あの本というかノートは・・・若かりし頃の黒い思い出の集大成・・・つまり黒歴史の塊なんだよね。・・・後から恥ずかしくなって自分以外開けられないように封印したけど・・・

その本がもしも、もしも、他人に見られたりなんかしたら・・・まちがいなく俺の人生＼（＾Ｏ＾）／オワタ

になるから何としても阻止したい。と言うわけでアカデミーの試験を受けたんだよね。

結果は言うまでもなく満点。開祖甘く見んなよ。

だが、問題としては、満点合格者なので周囲の目が・・・  
それ以前にどうしよう・・・もろ原作と関わる雰囲気じゃねえか  
いや、待て、焦るなセツナ・・・例えここがアカデミーだとしても  
原作キャラとの遭遇なんて確率は・・・

「ドン」

「いたっ」

「あ、すいません考え事してt」

・・・なんでさ、なんで、開始早々主人公と鉢合わせするんだよ

「ああ、気にしないで、私もぼーとしてたから」

「ああ、はい」

「私はマルローネ、マリーでいいよ」

「俺は、セツナ・・・じゃなて、ナギ・スプリングフィールド。長  
つたらしいからナギでいいよ」

やべー危うく本命言うところだった

「？何で名前を言い直したのか良くわかんないけど宜しくねナギ」

「こちらこそ、ところでマリーは受験生？」

「うん・・・あんまし自信ないけど」

「大丈夫だってマリーは受かるから」

というか、受からないと物語そのものが始まんないからな

「ありがとう」

結果としては・・・なかった

おいおい、嘘だろ

「落ちた」

「いや、まだ、希望はある・・・ハズ」

その時ふと、目に入っただのは・・・

『補欠合格者…マルローネ』

「マリ―補欠合格で受かってるぞ」

「本当！」

まるで閃光の様な早さで掲示板に向かうマリ―

「補・・・補欠合格」

「おめでとう？マリ―」

「うん・・・喜んでいいんだよね？」

「落ちなかっただけいいんじゃない？」

「そうよ！まだ落ちた訳じゃないもんね！」

「それと、ちなみにナギはどうだった？」

「・・・満点合格」

「トホホ・・・」

まあ、なんやかんやで、例の物は<sup>ブツ</sup>Get出来たから満足だけど・・・  
これから先はどうしょ

## 今後の考え（後書き）

後先考えてない主人公



## 原作開始（前書き）

また、飛びます

## 原作開始

みなさん。あれから3年の月日が流れ、卒業しました。その間にいろいろとありました。例えば

## Part 1

「セツナさん！」

「だれ？」

「覚えてませんかイングリドです」

??? 確かマリーがビビってる先生?  
あれ? でも、あの顔は確か・・・

「まさか、リッチちゃんの所の助手その1か」

「ええ、それと私の名前はイングリドです。いい加減覚えてください」

懐かしいな、誰だったか覚えてないけど頼まれて講師してた際に、教えたリリー（通称リっちゃん）の助手？娘？その1じゃん

「いやゝ時がたつのは早いな。助手その2は」

「ええ、その2は・・・知りません。ところでここで何してるんですか？」

「ん？ああ、最高成績者の商品目当て。その2とはまだ仲悪いのかお前ら」

「どうも馬が合わなくて。それと、あのノートってあなたのじゃ・・・」

「いろいろあるんだよ。察しろ」

「はぁ・・・」

「それと、俺の本名はばらすなよ。ばらしたらお前の黒歴史をばら撒くぞ」

「決して他言しませんので安心してください！」

「今は、ナギって名乗ってるから」

P a r e 2

「よっ！マリーはかどってるか？」

「あっ！ナギ、あんましはかどってないのよね〜今調合中だからちよっと待ってね」

「おい！マリーそんな魔力込めたら！」

「どっかあああああん」

「げっふ」

爆発とか久しぶりに見たぞ。え〜と使った素材は・・・アルテナの水だな・・・結果は失敗だろうが、たまに純度は悪いけど、物ができるときが・・・おい、なぜその材料で爆発物ができるんだ

「てへっ☆失敗しちゃった」

「おい」

などなど、いや〜結構ハプニング満載でしたな。（主にマリーが原因の爆発事故）

それは兎も角として、原作通りマリーが史上最低成績という結果を出して、5年で何か作品を持っていくらしいです。

はてさて、どうなる事やら。

## 原作開始（後書き）

リリーとの絡みを入れてほしいという意見がありましたので、無理やり付け加え

## 助手始めました

「なあ、マリーなぜこうなった」

「私に言われても・・・」

## 〈回想〉

「イングリッド先生・・・なにか・・・そのわたし悪いことしましたか？」

「マルローネ」

「はい！」

「あなたには特例として5年の時間内になにかモノを作って提出するように、この前言いましたよね」

「はい」

「ですが、こちらでは、あなた一人に任せてはとても不安という声が上がっています」

「はぁ・・・」

「そこで、こちらからある生徒にあなたの助手を頼むことにしました」

「ええ！、ちょ、聞いてませんよ！」

「あたりまえです。今言いましたから」

「あなたの場合、爆薬の調合に失敗して町が火の海なんてことになりかねませんから」

「うぐっ」

「助手に愛想尽かされないように、しっかりと励みなさい」

「はい」

〈回想終了〉

「で、私の助手っていうのが・・・ナギ？」

「まあ、そういうことになるな」

「まさか、ナギが助手なんて・・・」

「ああ、それと、マリーの監視を兼ねてるんで俺このアトリエに住み込みだからな」



「ええ〜!」

「ってことは・・・一つ屋根の下で若い男と女が一緒に住むってこと?」

俺、100歳は軽く超えてますけど・・・

「まあ、そういうことになるな」

「襲わない?」

「100%襲わないとは言わない。マリーは魅力的だしね」

「ハハハ・・・（でもナギなら別に／＼ダメダメ・・・しっかりしろアタシ）」

「コンコン」

「は〜い」

「おはようマリー」

「あら、シアじゃない」

「ナギもおはよう」

「ああ、おはよう」

「それにしても、結構立派なお店ね」

「まあ、アカデミーからの借り物だけどね」

「主に何を商品にして経営するの？」

「まあ、葉が妥当かな」

「うん、葉というのはいいと思うわ」

「そういえば、シア昔から体弱かったもんね」

「じゃあ、頑張ってたね」

「とえあえず、ここ、何も機材が無いからアカデミーで買ってこないとな」

「そういえば、そうね」

〈アカデミー〉

「ほえ〜結構高いんだね」

「学校からの支給金じゃ全部そろえるのは無理だな」

「うーん、どうしよう」

「とりあえず、後から出直そう」

「マリーは先に行っててまだ見たい商品があるから」

「わかったわ、門の前に正午集合ね」

「わかった」

「行ったか。ああ、お姉さん此処の参考書と機材、全部頂戴」

「全部？相当値が張るけど」

「これだけあれば足りる？」

とりあえず金貨10枚くらいでいっか（この世界では金貨は銀貨1000枚分）

「ちょっと足りないけど、まとめ買いだからサービスするわ」

「ああ、この住所に送っというて」

お金？昔取った鍊金術の特許で人生4，5回は遊んで暮らせる金がある

「ああ、待ったナギ、ごめんね、ちょっと遅れちゃって」

「別に問題ないぞ」

「それで、どこ行くの？」

「ああ、時間的に近くの森に行こうと思う」

「となれば善は急げね」

「おい、マリー」

たく・・・おれ本来原作と関わらないつもりだったんだがな、ま、いっか。なんとかなるだろ

## 助手始めました（後書き）

完全に原作と絡んでる…ヒロインはマリーの予定。要望があれば増やします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6369v/>

---

錬金術師…始めました…

2011年11月9日09時51分発行